

日本 LD 学会研究委員会 ギフテッド/2E ワーキング 調査結果報告書

研究者 片桐正敏・日高茂暢・小倉正義

テーマ ギフテッドの子どもたちの実態調査

1. 研究の背景と意義

わが国では、ギフテッドという言葉は広まってきているが、知的能力の高い子ども（以後、ギフテッドと称する）及びギフテッドと発達障害を併存している子ども（以後、2E と称する）への支援の実態は十分に明らかにされてきていない。そのため、本ワーキングでは、ギフテッド・2E の子どもたちへの支援の実態を把握するための調査を企画した。日本 LD 学会会員を対象に調査を実施し実態を示すことは、今後のギフテッド/2E 研究の啓発や方向性を示す意義があると考えられる。

2. 研究目的

本研究の目的は、教員、心理職等の支援者を対象に現在それぞれの現場で関わっている、知的能力の高い子ども（以後、ギフテッドと称する）及びギフテッドと発達障害を併存している子ども（以後、2E と称する）について現場の支援者が存在を認知しているか、こうした子どもたちへの教育・支援がどのように行われているのか、また、教育・支援上を行ううえでの課題点を明らかにすることである。

3. 期待される成果

ギフテッド・2E を対象としたこうした大規模な調査は類がなく、最終的には教育現場での支援・配慮に対して有効な示唆を与える研究となることが期待される。

4. 研究方法

①調査の手続き

2024 年 8 月 1 日(木)から 2024 年 8 月 31 日(土)を調査時期に設定し、教員、心理職等の支援者を対象にアンケート調査を行った。収集方法は Google フォームを使用し

た。回答時間は 10 分 から 20 分程度であった。以下の調査内容に関して、選択式・自由記述式の項目への回答を求めた。

②調査内容

教員対象の調査では、教職経験年数、これまでの教員経験、現在の業務内容について尋ねたうえで、ギフテッド・2Eに関して、認知、関わり、支援、学校内での人数、不登校・長期欠席、集団式知能検査の実施、校内研修について尋ねた。心理職等の支援者を対象とした調査では、職種・職歴・勤務先を尋ねたうえで、ギフテッド・2Eに関して、認知、関り、支援などについて尋ねた。

③調査対象者

2024 年 8 月 1 日時点での日本 LD 学会会員を対象とした。

④調査の実施場所

研究者が作成した Google フォームを使用した WEB 調査で実施した。

⑤調査の実施期間

研究倫理審査の承認後、2024 年 8 月 1 日～2024 年 8 月 31 日であった。

5. 倫理的な配慮

日本 LD 学会倫理委員会の承認を得た(承認番号倫理理 202302-2)。調査を実施する際には、厚生労働省の臨床研究に関する倫理指針（平成 21 年 4 月 1 日改正）に則る形で参加者へ書面で研究の目的、内容、方法、結果の使われ方、プライバシーの保護、同意に対する自由意思についてアンケート（WEB フォーム）に分りやすく記載した。また、回答を送信したことで、研究協力に同意を得られたものとした。

6. 結果

主な調査結果を下記に示す。

①教員対象の調査

回答者は 533 名

教員経験年数 24.07±10.09 年 (Range 1～46)

経験のある校種・担任：小学校通常学級担任 353 名、小学校特別支援学級担任 298 名、小学校通級指導教室・特別支援教室 225 名、特別支援学校 192 名の順で多かった。

現在の勤務：小学校通級指導教室・特別支援教室担任、小学校特別支援学級担任、小学校通常学級担任、特別支援学校の順で多く、その他の校種、担任等は 2 割未満であった。

ギフテッド・2E という言葉への認知：ギフテッドについては、「よく知っている」が 36.2%、「知っている」が 60.2%、2E については「よく知っている」が 16.7%、「知っている」が 41.3%、「聞いたことがあるが、よく知らない」が 19.7%、「聞いたことがない」が 22.3%であった。

ギフテッド・2E の子どもとの関わり：「ギフテッド（と考えられる）の子どもと関わったことがありますか？」という問いに対して、「はい」が 50.3%、「いいえ」が 43.3%であった。「2E（と考えられる）の子どもと関わったことがありますか？」という問いに対して、「はい」が 48.2%、「いいえ」が 51.8%であった。

ギフテッド・2E と考えた理由：それぞれ 268 件の回答があり、図 1、図 2 の通りであった。なお、その他の自由記述の回答には、「子どもの行動観察」「生育歴や家庭での様子を聞いて」に近いものが多かった。

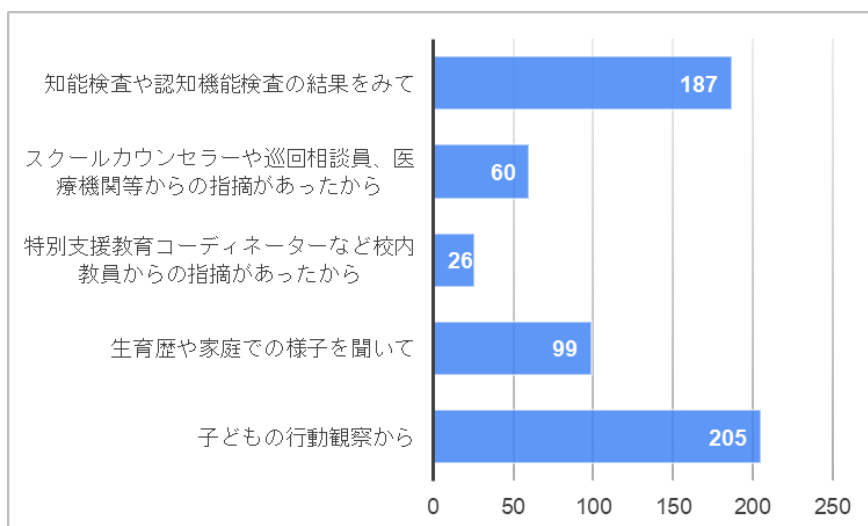


図 1 ギフテッドと考えた理由

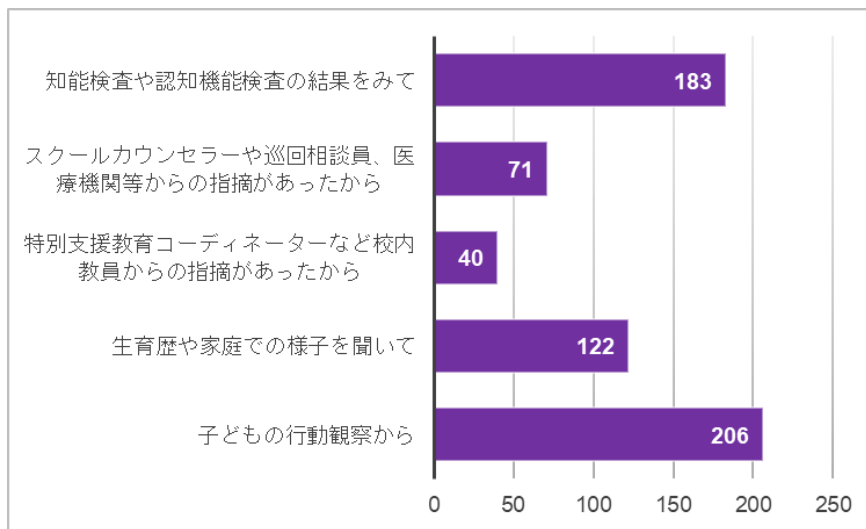


図2 2E と考えた理由

ギフテッド・2Eに関する支援の場:ギフテッド（と考えられる）の子どもの支援の場としては、通常学級（36.9%）、通級指導教室（33.2%）、特別支援学級（16.0%）、2E（と考えられる）の子どもの支援の場としては、通級指導教室（34.6%）、特別支援学級（25.3%）、通常学級（24.9%）の順で多かった。

ギフテッド・2Eへの支援:ギフテッド・2Eと考えられる子どもと関わったときの支援に対して、自由記述で回答を求めた結果、それぞれ250件以上の回答があり、本人に合わせた課題の準備や、指導内容・方法の工夫、得意なことを授業や学習で発揮できるようにするなどの工夫、多様なやり方、考え方を認めるといった内容がみられた。

②心理職等の支援者を対象とした調査

回答者は289名

経験年数:17.59±11.05年（Range：1～49）

職種:重複回答ありで、心理職（臨床心理士、公認心理師など）159名、福祉職（ソーシャルワーカー、児童指導員など）50名、リハビリ職（ST、OT、PT）28名、保育職（保育士など）25名、医師14名、その他の記載（大学教員、看護師、学習支援員など）38名であった。

ギフテッド・2E という言葉への認知：ギフテッドについては、「よく知っている」が48.1%、「知っている」が48.8%、2Eについては「よく知っている」が30.4%、「知っている」が46.4%、「聞いたことがあるが、よく知らない」が12.8%、「聞いたことがない」が10.4%であった。

ギフテッド・2E の子どもとの関わり：「ギフテッド（と考えられる）の子どもと関わったことがありますか？」という問いに対して、「はい」が73.0%、「いいえ」が27.0%であった。「2E（と考えられる）の子どもと関わったことがありますか？」という問いに対して、「はい」が67.1%、「いいえ」が32.9%であった。

ギフテッド・2E と考えた理由：ギフテッドと考えた理由には211件、2Eと考えた理由には194件の回答があり、図1、図2の通りであった（重複回答有）。なお、その他の自由記述の回答には、「子どもの行動観察」に近いものが多かった。

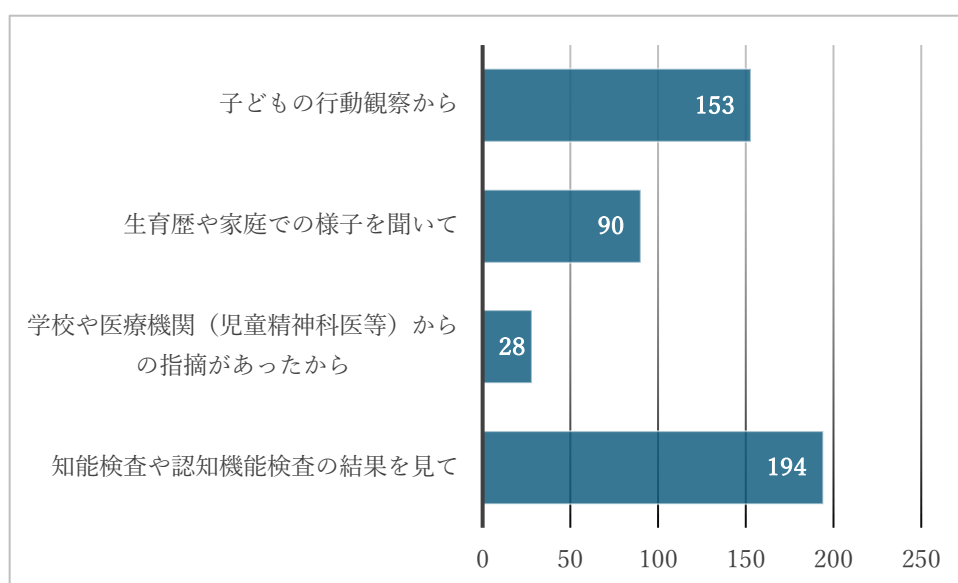


図1 ギフテッドと考えた理由

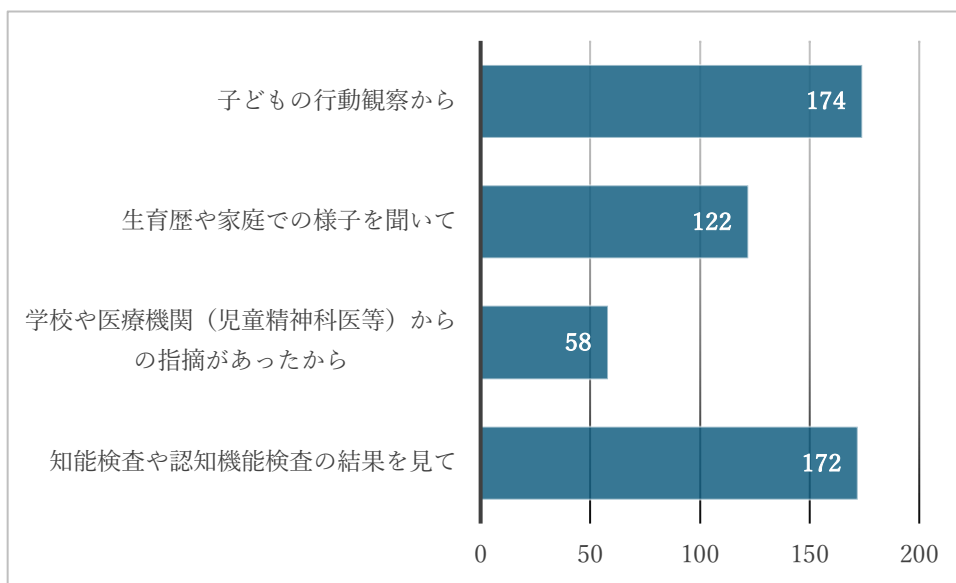


図2 2E と考えた理由

ギフテッド・2E への支援：ギフテッド・2E と考えられる子どもと関わったときの支援に対して、自由記述で回答を求めた結果、それぞれ 190 件以上の回答があり、得意なこと・興味のあることへのアプローチ、自己理解への支援、学校との連携などの内容がみられた。

7. まとめ

本ワーキンググループでは、知的能力の高い子ども（ギフテッド）および発達障害を併せ持つギフテッド（2E）の支援の実態を明らかにすることを目的とし、日本 LD 学会会員を対象に調査を実施した。ギフテッド・2E の子どもに関する大規模な調査は我が国では希少であり、本調査は今後の教育実践や研究の基盤となる貴重な資料である。

教員 533 名、心理職等 289 名からの回答を得た結果、両者ともに「ギフテッド」「2E」という概念に対する認知は一定程度存在し、半数以上がそうした子どもとの関わり経験を持つことが分かった。教員からは、本人に応じた課題設定や得意分野の活用、柔軟な指導法への工夫が、心理職等からは自己理解や興味関心への支援、学校との連携の重要性が挙げられた。支援の場としては、通級指導教室や特別支援学級が多く、通常学級との連携の必要性が示唆された。

本調査の実施にあたり、ご協力いただいた日本 LD 学会会員の皆さま、調査対象となった支援者の皆さまに心より感謝申し上げます。また、調査にご助言をいただいた関係研究者の皆さまにも深く御礼申し上げます。

今後は、本調査で得られた自由記述の分析をより深め、具体的な支援の在り方や制度的課題の抽出を進めていく予定である。さらに、支援実践の共有や研修体制の充実を図るとともに、ギフテッド・2E に関する啓発を通じた教育現場全体の理解促進を目指していきたいと考える。